

報 告

二人の子どもがいる母親に特有の育児困難感とその背景要因
— 4 か月齢の第二子を持つ母親と19か月齢の第二子を持つ母親の比較を通して —

小 島 康 生

〔論文要旨〕

第二子が4か月齢の母親(47名), 19か月齢の母親(51名)を対象に, 子どもが二人であることに特有の育児困難感とその背景要因を調べた。育児困難感とは, (1)スケジュール調整の困難さ, (2)第二子の行動についての悩み・困惑, (3)第一子の行動についての悩み・困惑, (4)第一子にかまっていられないことの4つを含むことが明らかになった。上記の(3)については, 第二子が4か月齢のときのほうが, (2)については, 第二子が19か月齢のときのほうが強かった。第二子が19か月齢の母親では, きょうだい間の年齢差, 夫による子どもの世話サポート, 夫婦関係満足度が, 育児困難感の背景要因にあることが示された。

Key words : 育児困難感, 母親, 子どもが二人である家族, 夫のサポート, 夫婦関係

I. 問題と目的

比較的年齢の低い子どもの育児の中で親が考えたり感じたりすることがらを「育児感情」と呼ぶことがある¹⁾。育児感情は, 子ども本人に向けられるものだけでなく, 子どもと共にある生活において親がたびたび経験するさまざまな感情を含む。わが国において, 育児に密着した生活を送っているのは母親であるため, 母親の育児感情についての調査が圧倒的に多い。また, その内容は大きく肯定的なものと否定的なものに分けられることが多い²⁾³⁾。このうち否定的な育児感情は, 育児ストレス, 育児負担感, 育児困難感などの用語であらわされることもあり^{4)~6)}, その延長線上に虐待など深刻な問題が横たわっている可能性もあることから, 研究テーマに取り上げられることが多い⁷⁾。

否定的な育児感情についての研究は, 初めての子どもの育てている母親を対象としたものが

多数を占め, 子どもの人数を考慮した分析がなされたものは少ない⁶⁾⁸⁾。その背景にあるものとして, 子どもの数自体が減り続け, さまざまな環境の変化によって以前のように街中で子どもが群れて遊ぶ様子を目にする機会が激減していることなどが挙げられよう。つまり, 自分の子どもを育てる以前に赤ちゃんや子どもに接する経験をほとんど持たないことが, 親になることへのハードルを高くしており, このことが育児ストレスをはじめ, いわゆる否定的な育児感情を生みやすくしているのだと考えられる。以上のような社会的, 歴史的な背景もあって, 第一子を育てる親を対象とした否定的な育児感情の研究が先行しているものと思われる。

一方, 本研究では, 第二子が誕生し, 二人の子どもの育児にかかわる母親を対象に調査を計画した。二人の子どもの育てる母親は, 子どもが一人であったときとは質的に異なるストレスを経験している。たとえば, 上の子どもの赤ちゃん

Child-Rearing Stress in Japanese Mothers Who Have Two Preschool Children

[1926]

Yasuo KOJIMA

受付 07. 4. 12

中京大学心理学部 (研究職/教育職)

採用 07. 9. 28

別刷請求先: 小島康生 中京大学心理学部 〒466-8666 愛知県名古屋市中区八事本町101-2

Tel : 052-835-7430 Fax : 052-835-7144

ん返りは、生まれて間もない乳児の世話に時間的・心理的傾倒を余儀なくされるなかでは、母親に過剰なストレスをもたらす⁹⁾¹⁰⁾。発達状況の異なる二人の子どもが母親に要求することがらや、その頻度はさまざま、そうした要求に一つひとつ応えたり、あるいは別の手段を講じたりしながら、母親は子どもと共にある生活を送っているのだといえる¹¹⁾。

本研究の目的は、こうした二人育ての真っ最中である母親を対象に、その生活の中で経験される特有の感情の構造を明らかにし、その感情の背景にある要因を探ることである。調査対象は、第二子が生後半年未満の母親と、およそ1歳半を過ぎた第二子のいる母親の2群であった。前者においては、まだ第二子の動きも限られている反面、第一子に赤ちゃん返り等の行動がみられやすい時期といえる¹²⁾¹³⁾。一方、後者は、第二子との言語的なやりとりも少しずつ可能になり、コミュニケーションがとりやすくなってくる反面、動きが活発化し、自己主張も盛んになるため、母親との葛藤が急速に高まっていく時期に相当する¹⁴⁾。本研究では、これら2つの時期の第二子を持つ母親の比較を通して、特に負担感、困難感の様相をたしかめ、その多様性(個人差)や背景要因の同定を目指す。

II. 方 法

1. 協力者および調査の手続き

愛知県内のある市が実施する3か月児健康診査、1歳6か月児健康診査を受診した母親のうち、当該の児が第二子である方に質問紙を配布した。保健所の待合室において筆者が個別に調査の趣旨を説明し、内容に賛同していただいた方にのみ、直接その場で質問紙を配布した。質問紙は無記名で、自宅で記入後、所定の返信用封筒に封入・厳封のうえ、筆者宛に返送してもらった。回収率は45%で、記入漏れ等、回答に不備があったものを除いて、98名(3か月児健康診査受診者47名、1歳6か月児健康診査受診者51名)のデータを分析に用いた。協力者の9割以上が核家族世帯で、専業主婦の母親が9割近くを占めた。表1は、協力者のその他の属性を示したものである。表からもわかるとおり、3か月児健康診査を受診した第二子の月齢は実

表1 協力者の主な属性

項目	3か月児 健康診査受診者	1歳6か月児 健康診査受診者
母親の平均年齢(歳)	31.34 (3.64)	33.35 (3.80)
父親の平均年齢(歳)	34.57 (6.54)	36.04 (4.73)
第一子の平均年齢(歳)	3.35 (1.27)	4.95 (1.83)
第二子の平均年齢(歳)	0.32 (0.04)	1.58 (0.07)
きょうだいの年齢差の 平均(歳)	3.03 (1.29)	3.37 (1.83)
きょうだい構成		
兄一弟(組)	14	10
兄一妹(組)	10	10
姉一妹(組)	11	13
姉一弟(組)	12	18

注。() 内の数値は標準偏差をあらわす。

際には4か月齢に近く、また1歳6か月児健康診査の受診者である第二子も、ほぼ19か月齢に達していた。このため、以降の文中では「4か月齢」、「19か月齢」という語句を用いる。

2. 質問紙の内容

i. 二人の子どもを育てていることに関連する育児困難感尺度

筆者らが以前行った調査結果¹²⁾をもとに、二人の子どもを育てている母親に特有の困難感を調べる尺度を作成した。質問項目は「上の子が下の子にちょっかいを出すので、すぐけんかになる」、「上の子と接する時間がほとんどない」、「自分の時間が持てない」、「家のことは、子どもたちが寝ているあいだに、さっと済ませる」など、日常生活に即した内容のものが中心で、25項目で構成されていた。これらすべての質問に対して、4件法(「1.ほとんどあてはまらない」、「2.どちらかといえばあてはまらない」、「3.どちらかといえばあてはまる」、「4.かなりあてはまる」)で、最もあてはまるものを選んでもらった。

ii. 夫によるサポート

夫のサポートについては、第一子の世話に関するもの、第二子の世話に関するもの、家事に関するものの3つの内容であった。第一子の世話については、「お風呂に一緒に入る」、「ご飯を食べさせたり、こぼしたおかずの処理をしたりする」、「着替えを手伝う」、「しつけをする」、

「悪いことをしたときに叱る」、「寝かしつけをする」、「朝、幼稚園（または保育園）まで送る」、「夕方、幼稚園（または保育園）に迎えに行く」の8項目について尋ねた。第二子の世話については、「お風呂に一緒に入る」、「着替えを手伝う」、「おむつを替える」、「しつけをする」、「悪いことをしたときに叱る」、「寝かしつけをする」、「朝、保育園等まで送る」、「夕方、保育園等に迎えに行く」の8項目であった。家事については、「食事のしたく」、「ご飯のあとかたづけ」、「お風呂の掃除やお湯張り」、「部屋の掃除」、「洗濯物干し」、「洗濯物の取り入れ」、「買い物」の7項目であった。以上23項目について、9つの選択項目から最もあてはまるものに○をつける方法で回答してもらった(1.いつも母親, 2.たいていは母親, 3.どちらかといえば母親, 4.母親・父親ほぼ同じ, 5.どちらかといえば父親, 6.たいていは父親, 7.いつも父親, 8.とくに必要ない, 9.たいていは両親以外)。

iii. 夫婦関係に対する満足度

諸井の作成した夫婦関係満足尺度を用いた¹⁵⁾。この尺度は6項目からなり、4件法(1.ほとんどあてはまらない, 2.どちらかといえばあてはまらない, 3.どちらかといえばあてはまる, 4.かなりあてはまる)で回答してもらった。

iv. 家庭の雰囲気

菅原・八木下・詫摩らが用いている家庭の雰囲気尺度を用いた¹⁶⁾。9項目からなり、4件法(1.はい, 2.少しはい, 3.少しいいえ, 4.いいえ)で回答してもらった。

v. 家族外の他者との関わり

家族外の他者との関わりについて、携帯やパソコンのメールでの友だちとのやりとり、電話での友達とおしゃべり、友達とお互いの家の行き来の3項目について、その頻度を5件法(1.全くない, 2.めったにない, 3.たまにある, 4.しばしばある, 5.しょっちゅうある)で回答してもらった。

3. 統計処理

統計処理には、SPSS バージョン12.0を用いた。

III. 結 果

1. 育児困難感についての因子分析の適用

二人の子どもがいる生活に関連して母親が困難に思っていることがらについて尋ねた25項目の回答に基づき、主因子法、プロマックス回転による探索的な因子分析を行った。固有値、スクリープロットの減衰状況から、4因子を抽出するのが妥当と考えて因子数を4に固定し、さらに共通性が低い項目、あるいは複数の因子にまたがって因子負荷量が高い項目を順次はずしながら、因子の構成を確認した。以上の手続きを経て、最終的に8つの項目(項目番号2, 3, 10, 11, 12, 20, 23, 25)を除外した17項目を用いた分析が最も妥当と判断した。第4因子までの固有値はそれぞれ4.87, 2.93, 1.33, 1.11, 累積寄与率は60.3%であった(表2)。

第1因子において因子負荷量が高かった項目は、いずれも家事や子どもの世話などを次々にこなさなくてはならない日常において不可欠と思われる、時間の調整に対する困難さをあらわす因子と考えられた。したがって、「スケジュール調整の困難さ」と命名した。第2因子を構成する3つの項目は、いずれも第二子の行動やしつけについての悩みや困惑をあらわしたものであったことから、「第二子の行動についての悩み・困惑」と命名した。同様に、第3因子に含まれる質問項目は、主に第一子の行動やしつけについての悩み、困惑をあらわしていたことから、「第一子の行動についての悩み・困惑」と命名した。第4因子もまた、第3因子と同様に、第一子に対する気持ちをあらわす項目で構成されていたが、こちらは「接する時間がない」(項目8)、「かわいそう」(項目4)、「目が行き届かない」(項目16)などの内容であったことから、「第一子にかまっていられないこと」と命名するのが妥当と考えた。

以上4つの因子において因子負荷量が0.4を超えた項目の平均値を算出し、これを以下の分析に用いた。なお、各因子の信頼性係数 α は、第1因子から順に0.77, 0.86, 0.76, 0.77で、十分に高い値であった。

因子間相関を第二子が4か月齢の協力者、19か月齢の協力者それぞれについてみたところ

表2 二人の子どもを育てることにかかわる育児困難感についての因子分析の結果

項目内容	因子負荷量				
	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	共通性
[第1因子:「スケジュール調整の困難さ」 $\alpha=0.77$]					
22 時間のやりくりがうまくいかない。	0.93	-0.04	-0.09	-0.09	0.70
13 子どもたちの世話がたいへんで、家のことをする時間がない。	0.62	0.04	-0.08	0.13	0.46
18 子どもが2人いると、寝かしつけが大変だ。	0.52	0.11	0.08	-0.04	0.33
14 自分の時間が持てない。	0.49	0.11	0.08	0.04	0.34
17 とっさの用事ができたときに、子どもが2人だと大変だ。	0.43	0.13	0.16	-0.09	0.27
7 子どもを風呂に入れるには、夫の協力が必要だ。	0.37	-0.16	0.21	-0.08	0.24
9 上の子の食事の世話に手がかかる。	0.37	-0.21	0.30	-0.03	0.35
21 子どもが2人になると、経済的に大変だ。	0.30	-0.12	-0.01	0.12	0.13
[第2因子:「第二子の行動についての悩み・困惑」 $\alpha=0.86$]					
6 下の子が、上の子にちょっかいを出すのですぐけんかになる。	-0.06	0.87	0.07	-0.11	0.67
5 下の子が、言うことを聞かなくて困る。	0.12	0.86	-0.05	0.03	0.84
1 下の子のしつけで苦労している。	0.03	0.72	-0.15	0.00	0.59
[第3因子:「第一子の行動についての悩み・困惑」 $\alpha=0.86$]					
15 上の子が、言うことを聞かなくて困る。	-0.04	-0.06	0.95	-0.13	0.83
19 上の子のしつけで苦労している。	0.09	-0.10	0.68	0.10	0.61
24 下の子ができたことで、上の子にはずいぶん我慢させていると思う。	0.06	0.22	0.50	0.20	0.44
[第4因子:「第一子にかまってあげられないこと」 $\alpha=0.77$]					
8 上の子と接する時間がほとんどない。	0.02	-0.15	-0.17	0.88	0.66
4 上の子と一緒に遊んでやれなくてかわいそうだ。	-0.10	0.08	0.22	0.80	0.74
16 上の子にまで目が行き届かない。	0.39	0.02	-0.02	0.40	0.47

注: 因子負荷量が0.40を超えたものを枠で囲んだ。

表3 育児困難感に関する因子間相関

因 子	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子
第二子が4か月齢の母親				
第1因子:「スケジュール調整の困難さ」	1.00	0.36 *	0.33 *	0.49 ***
第2因子:「第二子の行動についての悩み・困惑」		1.00	-0.03	0.24
第3因子:「第一子の行動についての悩み・困惑」			1.00	0.30 *
第4因子:「第一子にかまってあげられないこと」				1.00
第二子が19か月齢の母親				
第1因子:「スケジュール調整の困難さ」	1.00	0.33 *	0.57 ***	0.47 **
第2因子:「第二子の行動についての悩み・困惑」		1.00	0.17	0.13
第3因子:「第一子の行動についての悩み・困惑」			1.00	0.57 ***
第4因子:「第一子にかまってあげられないこと」				1.00

* $p < 0.05$; ** $p < 0.01$; *** $p < 0.001$

(表3), いずれの月齢のデータにおいても, 第1因子と他の3因子との間に中程度から非常に高い正の相関が, また第3因子と第4因子の間にも中程度から非常に高い正の相関が認められた。第二子への気持ちをあらわす第2因子と, 第一子への気持ちをあらわす第3, 第4因子との相関は, いずれも有意ではなかった。

2. 第二子の月齢による各変数の比較

前項で抽出された育児困難感の4つの因子について, 4か月齢である場合と, 19か月齢である場合に違いがあるかを検討した。平均値の差の検定を行ったところ, 第2因子, すなわち第

二子の行動に対する困惑は, 4か月齢の第二子を持つ母親よりも19か月齢の第二子を持つ母親のほうが, 強いことが明らかになった(4か月齢:1.06, 19か月齢:2.12, $t=9.67$, $p<0.001$)。また, 第3因子, すなわち第一子の行動への困惑は, 反対に4か月齢の第二子を持つ母親のほうが, 強いことが明らかになった(4か月齢:2.89, 19か月齢:2.53, $t=-2.37$, $p<0.05$)。第1因子, 第4因子については, 有意な差は認められなかった。

つづいて, 夫による育児, 家事への関与について, 第二子の月齢による比較を行った。この際, 第一子の世話, 第二子の世話, 家事そ

れぞれについて、項目全体の平均値を算出した。なお、夫婦の分担が「均等であった」という回答を「0」とし、妻の分担の比重が高い場合はマイナスの値に、反対に夫の分担の比重が高い場合はプラスの値に変換した (range: -3, -2, -1, 0, +1, +2, +3)。選択肢8 (「とくに必要ない」), 9 (「たいていは両親以外」) についても、夫婦の分担に偏りが無いという点では「均等」と同様であるとみなし、「0」とした。第一子、第二子の送り迎えについては、そもそも通園、通学していない子どもや、すでに小学校に入学して送迎の必要がない子どもが含まれていたことから、計算から除外した。したがって、第一子、第二子の世話については、これらを除く6項目について平均値を算出したことになる。

第一子、第二子それぞれの世話と家事のサポートの得点を従属変数とし、第二子の月齢 (4か月齢, 19か月齢) を独立変数とする多変量分散分析を行った結果、有意な違いが認められた ($F=3.24$, $p<0.05$)。このため、それぞれを従属変数とする分散分析を個々に行ったところ、第二子の世話について有意に近い差がみられ ($F=3.02$, $p<0.09$)、4か月齢のデータに比べ、19か月齢のデータのほうが、値が低い傾向が認められた。第一子の世話、家事については、有意な差は認められなかった。

夫婦関係に対する満足度については、6項目すべてをもとにした信頼性係数が十分に高い値であったことから ($\alpha=0.93$)、平均値を算出し、第二子の月齢による比較を行った。分析の結果、

4か月齢のデータに比べて、19か月齢のデータのほうが、値が有意に低いことが明らかとなった ($t=-2.30$, $p<0.05$)。

家庭の雰囲気についても、9項目すべてをもとにした信頼性係数が十分に高い値であったことから ($\alpha=0.85$)、平均値を算出した。第二子の月齢による比較を行ったが、両者に有意な差はなかった。

母親の家族外の他者との関わりについては、これに含まれる3項目の値を合計し、第二子の月齢による比較を行った。ここでも、4か月齢のデータと19か月齢のデータに有意な差は認められなかった。

3. 育児困難感に対するクラスター分析の適用

先に抽出された育児困難感の4因子を組み合わせて、どのようなタイプ分けが可能か、クラスター分析を用いて検討した。第二子が4か月齢のデータと、19か月齢のデータ、それぞれについて、Ward法によるクラスター化を試みた。なお、クラスター間の距離については平均ユークリッド距離を指標とした。

4か月齢のデータに関してデンドログラムを作成し、クラスターをいくつにするのが妥当か、検討を重ねた。それぞれのクラスターに分類される母親の人数や、それぞれのクラスターの持つ特徴について仔細に検討し、3クラスターを構成するのが適当と判断した。19か月齢のデータについても、同様の手続きを取り、こちらも3クラスターに分類するのが妥当と判断した。表4に、4か月齢、19か月齢それぞれについて、

表4 クラスター分析の結果

育児困難感の因子	第二子が4か月齢の母親			第二子が19か月齢の母親		
	クラスター1 (n=15)	クラスター2 (n=7)	クラスター3 (n=23)	クラスター1 (n=23)	クラスター2 (n=16)	クラスター3 (n=10)
第1因子:「スケジュール調整の困難さ」	3.20 (0.41)	1.86 (0.28)	2.70 (0.45)	2.81 (0.58)	3.20 (0.49)	1.90 (0.45)
第2因子:「第二子の行動についての悩み・困惑」	1.07 (0.19)	1.00 (0.00)	1.04 (0.11)	2.30 (0.73)	2.38 (0.67)	1.27 (0.44)
第3因子:「第一子の行動についての悩み・困惑」	3.51 (0.47)	1.71 (0.40)	2.84 (0.58)	2.38 (0.60)	3.00 (0.74)	2.13 (0.86)
第4因子:「第一子にかまわなければならないこと」	2.89 (0.33)	1.33 (0.27)	1.90 (0.44)	1.96 (0.41)	3.13 (0.27)	1.63 (0.84)

注. 表中の数値はすべて平均値。() 内の数値は標準偏差をあらわす。

クラスターごとの特徴を示した。

4 か月齢のデータに関しては、育児困難感の第1, 第3, 第4 因子において, 3つのクラスターのすべての組み合わせで有意な違いが認められた(いずれも, クラスター1 > 3 > 2)。第2 因子については, クラスター間に違いがなかった。それぞれのクラスターの特徴をまとめると, 以下ようになる。第1 クラスターに分類された母親は, 一日のスケジュール調整が困難だと感じており, 第一子の行動についての悩みや困惑が大きい反面, 十分にかまってあげられず, かわいそうな思いをさせているという意識も強かった。第2 クラスターの母親は, これら3つのいずれの因子においても値が低く, すなわち子どもの行動に対する悩みや困惑が少なく, 一日のスケジュール調整にも困難を感じていない母親であった。第3 クラスターの母親は, これら2つのクラスターの中間にあたる母親であった。

19か月齢のデータについても, クラスターごとの特徴を整理した。分散分析の結果, 育児困難感のすべての因子において, クラスター間の違いが有意であった。第1 クラスターの母親は, 第一子の行動に関する悩みは特別に大きいわけではないが, 第二子の行動に対する困惑が強く, 一日のスケジュール調整に中程度の困難さを感じていた。第2 クラスターの母親は, 一日のス

ケジュール調整に強い困難を感じており, そのうえ, それぞれの子どもの行動に対しても悩みや困惑を抱えていた。さらに, 第一子に対しては, かわいそうな思いをさせているという感情も伴っていた。第3 クラスターの母親は, 子どもの行動に対する困惑が少なく, 一日のスケジュール調整にもさほど困難を感じていなかった。

4 か月齢, 19か月齢のそれぞれのデータから構成されたクラスターを比較してみると, 4 か月齢のデータの第1 クラスターと19か月齢のデータの第2 クラスターが似た特徴を持っており, 4 か月齢のデータの第2 クラスターと19か月齢のデータの第3 クラスターもまた比較的似ていた。

4. クラスターと他の変数との関連

前項で抽出されたクラスターと, 他の変数との関連について分析を行った(表5)。子どもの性別によってクラスターの分類の偏りがないかを, 4 か月齢, 19か月齢それぞれのデータについて調べたところ, 19か月齢のデータにおいて第一子の性別による偏りが有意で($\chi^2=6.81$, $p<0.05$), 残差分析の結果, 第2 クラスターには第一子が女兒であるものが, また第3 クラスターには第一子が男児であるものが多く含まれることがわかった。

表5 各変数についてのクラスター間の比較

	第二子が4 か月齢の母親			第二子が19か月齢の母親		
	クラスター1 (n=15)	クラスター2 (n=7)	クラスター3 (n=23)	クラスター1 (n=23)	クラスター2 (n=16)	クラスター3 (n=10)
第一子の性別						
男児(名)	9	3	10	9	3	7
女児(名)	6	4	13	14	13	3
第二子の性別						
男児(名)	11	2	11	15	10	3
女児(名)	4	5	12	8	6	7
きょうだいの年齢差の平均(歳)	3.06(1.32)	2.66(0.89)	3.16(1.43)	3.39(1.73)	3.13(1.24)	3.81(2.81)
夫によるサポート						
第一子の世話	-1.68(0.77)	-1.81(0.89)	-1.35(0.59)	-1.61(0.93)	-1.40(1.06)	-1.13(0.65)
第二子の世話	-1.58(0.80)	-1.93(0.45)	-1.49(0.59)	-1.91(0.89)	-2.03(0.69)	-1.52(0.65)
家事	-2.53(0.58)	-2.27(0.85)	-2.37(0.66)	-2.39(0.74)	-2.52(0.49)	-2.30(0.82)
夫婦関係の満足度	3.16(0.61)	3.07(0.97)	3.14(0.46)	2.98(0.72)	2.42(0.69)	3.27(0.90)
家庭の雰囲気	3.33(0.34)	3.57(0.66)	3.54(0.36)	3.33(0.34)	3.57(0.66)	3.54(0.36)
他者との関わり	9.93(3.06)	9.43(1.99)	10.00(2.15)	9.74(2.24)	10.13(2.50)	10.90(3.31)

注. () 内の数値は標準偏差をあらわす。

夫婦関係に対する満足度においては, 19か月齢のデータにおいてクラスター間の違いが認められ ($F=4.55$, $p<0.05$), Tukeyによる多重比較の結果, 第3クラスターに分類された母親は, 第2クラスターに分類された母親よりも, 夫婦関係への満足度が高いことがわかった ($p<0.05$)。第1クラスターに分類された母親も, 第2クラスターの母親より, 夫婦関係に対する満足度が高い傾向にあった ($p<0.07$)。

きょうだい間の年齢差, 夫の家事, 育児サポート, 家族の雰囲気, 家族以外の他者との関わりについては, いずれもクラスター間の違いは有意でなかった。

5. 多項ロジスティック回帰分析の適用

最後に, 母親の育児困難感に関与する要因を探るために, クラスター分類を従属変数, その他の変数を独立変数とする多項ロジスティック回帰分析を行った。多項ロジスティック回帰分析とは, 従属変数がカテゴリー変数である場合に, 他の複数の説明変数から, そのカテゴリーを予測することが可能かどうかを調べる分析法で, そのモデルが十分な適合度を示した場合, いずれの説明変数がカテゴリー分けに寄与しているかを, 他の説明変数の影響を制御したうえで把握することができる。4か月齢, 19か月齢それぞれのクラスターにおいて, 最も育児困難感が高い特徴を有したクラスター(4か月齢のデータでは第1クラスター, 19か月齢のデータ

では第2クラスターがこれに該当する)を基準クラスターとし, これとの比較において, 他のクラスターがどのような特徴を備えているかを調べた。

分析の結果, 4か月齢のデータについては, モデルの適合が不十分であることが明らかになった ($\chi^2=18.93$, ns)。このことはすなわち, 本研究で扱った変数(子どもの性別, きょうだい間の年齢差, 夫のサポート, 夫婦関係の満足度, 家族の雰囲気, 家族外の他者との関わり)から, クラスター分類を予測することができないことを意味する。これに対して, 19か月齢のデータにおいては, モデルは十分な適合を示し ($\chi^2=41.55$, $p<0.01$), これらの変数から, 母親のクラスター分類が可能であることが明らかになった(表6)。個々の説明変数について非標準化係数と有意確率をみると, 第二子の性別における非標準化係数が有意な負の値を示し, 第二子が男児であったほうが, 育児困難感の低いクラスターに分類されやすいことがわかった。きょうだい間の年齢差においては, 非標準化係数が正の値であり, きょうだい間の年齢差が大きいことが, 育児困難感が比較的低い第1, 第2クラスターへの分類を予測することがわかった。さらに, 夫による第一子の世話サポートでは, 非標準化係数が有意な負の値を, 第二子の世話サポートでは有意な正の値を示した。これは, 第一子の世話においては夫のサポートが少ないことが, 反対に第二子の世話におい

表6 第二子が19か月齢の母親に関する多項ロジスティック回帰分析の結果

	クラスター1		クラスター3	
	非標準化係数	オッズ比	非標準化係数	オッズ比
切片	-13.25		-26.96	
第一子の性別: 女児	-0.67	0.51	0.64	1.90
第二子の性別: 女児	-6.45 *	0.00	-8.58 **	0.00
第一子と第二子の年齢差	1.42 *	4.12	2.08 **	8.02
夫による第一子の世話サポート	-6.46 *	0.00	-6.89 *	0.00
夫による第二子の世話サポート	6.42 *	613.32	7.22 *	1,360.73
夫による家事サポート	-1.42	0.24	-1.90	0.15
夫婦関係の満足度	0.43 *	1.54	1.90 *	6.66
家庭の雰囲気	4.73	113.56	6.16	472.08
家族外の他者との関わり	-0.18	0.83	-0.12	0.88
モデル適合度	-2 対数尤度=53.89 (切片のみの場合, 95.44), $\chi^2=41.55$, $p<0.01$			

* $p<0.05$; ** $p<0.01$

ては夫のサポートが多いことが、育児困難感の比較的低いクラスターへの分類を予測することを示している。夫婦関係への満足度においては、非標準化係数が有意な正の値を示し、満足度が高いことが、育児困難感の少ないクラスターに分類されることと関係していた。

IV. 考 察

1. 二人の子どもを育てていることに特有の育児困難感の構造

子どもが二人であることに特有の困難感とは、大きく4つの因子で構成されることがたしかめられた。なお、本研究で使用した困難感尺度は、実際に二人の子どもを育てている母親が日々の生活の中で困っていること、悩んでいることについて自由記述したものをもとに作成されており、具体的に現実性の高い項目が中心であったことを強調しておきたい。

因子として最初に抽出されたのは、一日の生活スケジュールを調整することの困難さであった。このことは、育児が母親の生活の中に埋め込まれていることを改めて認識させる。家事その他も含め、限られた時間の中で、多重に押し寄せるさまざまなことがらをいかにこなすか、いわば待ったなしの状況への戸惑いが率直に表現されたものと思われる。

一方、第2因子以降は、いずれもそれぞれの子どもへのさまざまな気持ちが因子として抽出された。特に、第2、第3因子があらわす、それぞれの子どものしつけや行動に関する悩みや困惑は、子どもの行動そのものに特有の問題であると同時に、それを「困ったものだ」と認識する母親の側の、いわば否定的な感情の萌芽を反映したものと筆者は考える。子どもの年齢段階に応じた期待に即して、それらが順に達成されるように促すことは、親の大きな関心のひとつだが、そのときどきの子どもの様子を見て「困ったものだ」と感じ、困惑するに至るのは、子どもが二人であるという状況において心理的な余裕が失われがちなこととも無関係ではあるまい。事実、第1因子と第2、第3因子との間には強い相関が認められ、このことは、毎日の生活をこなしていくことに困難感を持っている母親ほど、それぞれの子どもの行動やしつけに

対する悩みや困惑が大きいことを意味している。

これと同時に興味深いのは、第一子に限って、もっと関わってあげたいのに十分に時間が取れず、それを申し訳なく感じる気持ちがひとつの因子として抽出された点である。しかも、第3因子と第4因子には正の相関が認められ、第一子に対して両価的な感情が母親の側にあることがわかる。「困ったものだ」と感じる反面、思うようにかまっていられないことへの反省の気持ちがここにあらわれているのではないのか。

以上の4つの育児困難感について、第二子が4か月齢の場合と19か月齢の場合とを比較したところ、第2因子、すなわち第二子のしつけや行動に対する困惑は、19か月齢においてのほうが強かった。そもそも4か月齢の子どもに対しては、しつけどころではなかったものが、1歳半を過ぎて徐々に自己主張や母親の期待・要求に反する行動が目立ちはじめ、そのことが母親の困難感を引き起こしているものと思われる。

一方、第3因子、すなわち第一子のしつけや行動に対する困惑は、4か月齢においてのほうが強かった。よく指摘されるように、第二子の誕生が第一子に課す心理的負担は、第二子の誕生から日が浅いほど強く、新しいメンバーを含めた生活にも適応が進んでいない⁹⁾。このことが、第一子の行動に対する母親の困惑を誘発したのではないだろうか。

本研究の特色のひとつは、4つの内容の育児困難感をもとに、母親をグループ分けしたところにある。4か月齢、19か月齢のいずれのデータからも、因子全般にわたって困難感が強いグループと、反対に困難感が低いグループが見出され、全体に占める割合も、4か月齢のデータと19か月齢のデータでかなり似ていた。第二子が19か月齢の母親においてのみ抽出されたのは、クラスター1のように、第一子のしつけや行動にはさほど強い困惑を感じていないが、第二子のしつけや行動にかなりの困惑を示し、生活スケジュールの調整にも困難を感じているグループで、割合からしても、このグループの母親が最も多かった。このことは、すでに指摘したように、この時期に至って、第二子の発達の状況が母親の困難感に相当の影響を与え始めて

いることをあらわしている。

2. 育児困難感の背景要因

育児困難感と他の変数との関連については、多重ロジスティック回帰分析を適用することで、育児困難感の個人差に何が背景要因として有力かを示すことができた。第二子が4か月齢の母親の育児困難感を他の変数によって説明することはできなかったが、第二子が19か月齢に達している母親の育児困難感には、本研究が扱ったいくつかの変数の影響が認められた。

第一に、第二子が男児である場合のほうが、母親の育児困難感が低いことがわかった。これについては解釈が非常に難しいが、一般に男児のほうが活動性が高く、活発であることが知られており¹⁷⁾、女兒に比べて外交的な面が強い。このことが、何らかのかたちで結果に反映した可能性はあるが、これについてはあくまで推測に過ぎない。この点については、今後さらなる検討が必要であろう。

本研究ではさらに、きょうだいの年齢差が大きいほど、育児困難感は全体に低いことが示された。年齢差が大きいということは、すなわち第一子の年齢が高いことを意味しており、さまざまなことが一人でできるようになりつつあると同時に、情動をコントロールする力もより向上していることが想像される。こうしたことが、母親の育児困難感を低下させる効果を持っていたのであらうと思われる。

夫のサポートが育児困難感に及ぼす影響については、単純な分散分析では違いが認められなかったものの、他の変数の影響を統制した多重ロジスティック回帰分析からは有意な関連が認められた。まず、第二子に対する関わりでは、夫がよく関わっているほど、母親の育児困難感が低かった。これは、従来の研究でも指摘されているとおり、夫のサポートによって母親の負担が軽減され、毎日の生活の中で感じる困難感を抑制しているものと解釈される。すでに述べたように、この時期には、第二子の自己主張が高まり、親と対立することが多くなる。夫がさまざまな面で第二子に関わることで、母親の心理的な余裕を生むものと思われる。

一方、夫から第一子への関わりについては、

反対に、サポートが少ないほうが、育児困難感が低いという結果であった。これについては、2通りの解釈が可能であろう。第1に、育児困難感が低い状況では、そもそも夫のサポートがなくても、問題なく毎日の生活を送ることができ、したがって夫が第一子に関わる必要があまりなかったのだという解釈である。これに対し、もう1つの解釈は、しだいに自立の方向へと進みつつある第一子に対して、生活上のさまざまな局面であえて世話をしないでいるほうが、ますます手がかからなくなり、結果として母親の育児困難感を軽減させるのではないかというものである。逆に言うと、夫が積極的に手をかけることで第一子は依然として親を頼りにしつづけ、「まだ助けを借りないとできないのは困ったものだ」という気持ちを生じさせるのかもしれない。結果として、第二子の世話を夫がしてくれることに対しては、肯定的な評価がなされやすい反面、第一子の世話をしてくれることに対しては、必ずしも肯定的に捉えられるばかりではないのではないか。子どもに接する時間が圧倒的に長い母親にとって、二人の子どもに同時に関わらなくてはならない状況はさまざまな生活の局面で負担が大きき¹⁸⁾、特に年長の子どもには自分のことは自分でできるようになってほしいという期待が大きい。したがって、筆者はこの2つ目の解釈もまた母親の心情の一側面をあらわしているのではないかと予想する。もっとも、より詳しくは、質問紙のほかにインタビュー調査を取り入れるなどして、丹念な分析が必要と思われる。

第二子が19か月齢の場合には、上記のような興味深い結果が得られたが、4か月齢のデータでは、なぜ育児困難感との関連が見られなかったのだろうか。これまでに行われてきた育児ストレス、育児負担感などの研究では、生後半年に満たない子どもを持つ母親にとって、夫のサポートや夫婦関係などが効果的であることが指摘されてきた。しかし、これらの研究はほぼ例外なく、初めての子どもの子育てにおける調査であった。子どもが二人であるという状況においては、まだ第二子の生活リズムも不安定で、昼夜間断なく繰り返される授乳のために十分に睡眠を取ることも難しいこの時期には、夫

のサポートや夫婦関係その他の要因が、毎日の生活での育児困難感を和らげる緩衝材とはなりにくいのかかもしれない。第二子を家族に迎えた生活が軌道に乗り、1つのシステムとして家族が新しい構造を形づくっていくには、1年以上の時間が必要だという指摘もある¹⁹⁾。生後半年に満たない第二子のいる家族は、まだその過渡期にあるのだと考えられよう。

V. 本研究の問題点と今後の展望

本研究は、子どもが二人である母親を対象を限定し、そのことに関連した育児感情の構造と個人差を生み出す背景要因を明らかにしようとする探索的な研究として位置づけることができよう。なお、本研究にはいくつかの問題点が指摘できる。第1に、本研究は、限られた地域に住む、比較的少数の協力者を対象にしたものであったという点である。得られた結果を一般化するためには、さまざまな地域を含む、より大規模な調査が必要と考える。第2に、考察でも触れたように、質問紙調査による数量的な処理をもって明らかにされたことをより妥当な解釈へと結びつけるためには、子育てをしている親たちへのインタビューなどを交えた二次調査が必要と考える。以上の点を今後の研究へと活かしたい。

文 献

- 1) 諏澤宏恵, 加藤則子, 山田和子. 親の育児感情に影響を及ぼす乳幼児の年齢別要因の検討—PSI概念モデルをもとにした児の年齢別比較—. 小児保健研究 2007; 66: 402-411.
- 2) 荒牧美佐子. 育児への否定的・肯定的感情とソーシャル・サポートとの関連—ひとり親・ふたり親の比較から—. 小児保健研究 2005; 64: 737-744.
- 3) 浅川潔司, 鎌田陽世, 横川和章ら. 母親の育児感情の構造に関する研究. 兵庫教育大学研究紀要. 第1分冊, 学校教育・幼児教育・障害児教育 1999; 19: 139-143.
- 4) 海老原亜弥, 秦野悦子. 保育園・幼稚園児を育てる母親の育児負担感—ストレッサー, コーピング, ソーシャル・サポートの関係—. 小児保健研究 2004; 63: 660-666.
- 5) 中嶋和夫, 齋藤友介, 岡田節子. 母親の育児負担感に関する尺度化. 厚生指針 1999; 46: 11-18.
- 6) 嶋松陽子, 高山知美. 双子を養育する母親の育児困難感とその要因. 保健科学研究誌 2004; 1: 35-42.
- 7) 山川玲子, 柏木恵子. 母親の子ども・育児感情—虐待の温床としての育児不安の要因—. 文京学院大学研究紀要 2004; 6: 185-200.
- 8) 都筑千景, 金川克子. 出産後から産後4か月までの子をもつ母親に生じた育児上の不安とその解消方法—第1子の母親と第2子以上の母親における比較—. 日本地域看護学会誌 2001; 3: 193-198.
- 9) Dunn J, Kendrick C, MacNamee R. The reaction of first-born children to the birth of a sibling: Mothers' reports. J Child Psychology and Psychiatry 1981; 22: 1-18.
- 10) 大月恵理子, 森 恵美. 第2子出生に伴う家族の適応過程. 日本母性看護学会誌 2002; 2: 31-40.
- 11) Kojima Y. Mothers' adjustment to the birth of a second child: A longitudinal study on use of verbal and nonverbal behaviors toward two children. Psychological Reports 1999; 84: 141-144.
- 12) Kojima Y, Irisawa M, Wakita M. The impact of a second infant on interactions of mothers and firstborn children. J Reproductive and Infant Psychology 2006; 23: 103-114.
- 13) Nadelman L, Begun A. The effect of the newborn on the older sibling: Mothers' questionnaires. Lamb ME, Suttonsmith B, eds. Sibling Relationships: Their Nature and Significance Across the Lifespan. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates, 1982: 13-37.
- 14) 坂上裕子. 歩行開始期における, 子どもの反抗・自己主張に対する母親の対応: 子どもの月齢, 出生順位, 発達の変化との関連. 帝京大学心理学紀要 2003; 7: 59-78.
- 15) 諸井克英. 家庭内労働の分担における衡平性の知覚. 家族心理学研究 1996; 10: 15-30.
- 16) 菅原ますみ, 八木下暁子, 詫摩紀子ら. 夫婦関係と児童期の子どもの抑うつ傾向との関連: 家

族機能および両親の養育態度を媒介として. 教育心理学研究 2002 ; 50 : 129-140.

- 17) Kusanagi E, Hoshi N, Chen S. Structure, developmental change, and sex differences in temperament of Japanese children. Annual Report of the Research and Clinical Center for Child Development 1997 ; 21 : 17-26.
- 18) 小島康生. 二人の子どもを持つ母親の子どもへのかかわりに関する自然観察研究 —信号のない横断歩道場面での観察データから—. 家族心理学研究 2006 ; 20 : 109-121.
- 19) Kreppner K. Changes in parent-child relationships with the birth of the second child. Marriage and Family Review 1988 ; 12 : 157-181.

[Summary]

This study examined child-rearing stress in mothers whose secondborn children were 4 or 19 months old ($n = 47, 51$), and its relationship to family-related factors (mother's perception of husband's child-care and household activities, satisfaction in marital relationship, family atmosphere, and social support). Primary factor analyses, with promax rotation, revealed 4 mutually related factors that were associated with perceived daily stress : (1) time management of multiple tasks, including child care for each of the children, household tasks, and other personal affairs, (2) response to annoying behaviors of the secondborn children, (3) response

to annoying behaviors of the firstborn children, and (4) consciousness of less involvement with the firstborn child. The response to the behaviors of the firstborn child was rated higher by mother who had 4-month-old secondborn children than those who had 19-month-old counterparts, whereas the response to the behaviors of the secondborn child was highly rated by mothers who had 19-month-old secondborn children. Multiple logistic regression analyses showed significant effects of other family-related factors on the grouping (high, moderate, and low) of mothers who rated differently on 4 factors associated with child-rearing stress only for mothers who had 19-month-old secondborn children, suggesting that the difference in age between the two children, the husband's child care activities for each of the children, and satisfaction in the marital relationship were each strong predictors of the mother's child-rearing stress. The family system may be gradually reconstructed and become stable during the 2 years after the birth of the secondborn child. Changes in maternal expectations toward firstborn children are also discussed in terms of adaptation in a two-child family.

[Key words]

child-rearing stress, mother, two-child family, husband's support, marital relationship